



ウフィツィ美術館展 東京都美術館

2014年10月11日～12月14日

(11/16記)

銀行家として隆盛を極めたメディチ家の自家コレクションを集結させたフィレンツェのウフィツィ美術館 (La Galleria degli Uffizi) から、テンペラ、フレスコ、油彩などによる、聖母子像を中心とした絵画が来日した。特にメディチ家の庇護によって才能を開花させたサンドロ・ボッティチェッリ (Sandro Botticelli 1445～1510) については、駆け出しの頃の師に忠実な画～依頼主メディチ家隆盛時代の伸びやかで華やかな画～サヴォナローラの圧政により暗く抑えた画と、その画風の変遷を追う事が出来る。それはメディチ家の栄枯盛衰に連動したボッティチェッリの人生とも言える。他にドメニコ・ギルランダイオの作品も光る。また大工房時代から新時代様式の間珍しく sfumato 技法の作品も見られる。

個人的に注目したのはアンドレア・デル・サルト。“失敗のない画家”と評される彼の自画像のエピソードが面白い。絵の具が余ったので妻を描こうとしたら断られたので、サッと自画像を描いたという。その書き損じのない速筆描写力で描いたフレスコ「ピエタのキリスト」が展示されている。



左はボッティチェッリ「パラスとケンタウロス」の一部。メディチ家の標章を付けたパラス(ミネルヴァ)は理性(美德)を表し、ケンタウロス(本能・肉欲)を制する。